

フランス語状況表現の記述のために

曾 我 祐 典

1. はじめに

フランス語における状況の表現手段は、状況補語・状況節のようにカテゴリーを設けて論じられることが多いが、これらカテゴリーの規定じたいが困難をとまなうことは周知のとおりである (ARRIVE, M. *et al.*, 1986, pp. 100-101 ; PRANDI, M., 1987, pp. 50-70 ; *etc.*)。伝達行為の産物である発話に考察範囲を限り、観察される表現手段を形態と表面的な意味によって分類しようとする記述態度には問題があることは、曾我 (1988, pp. 148-149) にも指摘したとおりである。コミュニケーションの場で発話者が、事柄の中核に付随する状況要素をどのようなものとして捉え、フランス語でどのように表わそうとするのか、このように問題を設定しなければならない。伝達行為・発話形成プロセス中に状況の表現行為を位置づける立場から、フランス語の状況表現の記述の枠組を概説するのが本稿の目的である。

以下では、発話者が言及しようとする事柄についてイメージを形成する過程を想定し (2), 形成したイメージからフランス語表現に至る諸操作を考察し (3), イメージ中の状況要素の表現手段としての補足要素を概観する (4) ことにしたい。

2. 事柄の把握：イメージ形成

コミュニケーションの場でわれわれが発話を作り出すプロセスの解明は、KERBRAT-ORECCHIONI, C. (1979, pp. 90-112) の指摘を待つまでもなく、方法論的な困難のために十分に進んでいない。POTTIER, B. (1974, 1987) には随所に興味深い仮説が見られるが、発話者による事柄の把握から発話に至るプロセスに関しての論述 (1987, pp. 106-115 など) から読み取れる〈事柄→分析図式→語彙素選択→基部選択→(必要に応じて) 諸操作〉という考えには疑問がある。曾我 (1988, pp. 152-153) に示したように、〈事柄→(選択的) イメージ→原則として主要要素が基部となるような語彙素選択→(必要に応じて) 諸操作〉という手順のほうが事実に近いと考えられる。ここでは、プロセスの前半、すなわち、イメージを形成するまでの段階について筆者の考えの概略を記す。

2.1 イメージに登場する要素

a. コミュニケーションの場の構成要素は POTTIER, B. (1987, pp. 10-17) が示すとおりで、プロセスは次のように始まると考えられる。すなわち、発話者は自分を取りまく世界についての知識・認識と想像世界をもち、それを少なくとも部分的にはコミュニケーションの相手が共有していると考えている。発話者にはまた、場面の性格や相手との社会的・心理的關係などさまざまな要因を含むコミュニケーションの状況と、相手と交わした言葉・話の流れといった文脈についての総合的な認識がある。このような基盤に立って、相手になんらかの働きかけ (情報の提供・要請, 行動の要請, etc.) をする意図をもって、発話者はある瞬間に現実・想像世界のなんらかの事柄に言及しようとする。

一切の出来事は必ず、どこかで、いつか、なんらかのしかた・事情で起こるのだから、発話者が言及しようとする事柄も、中核部分と空間的状況、時間的

状況およびその他の観念領域に属す状況（以下では観念的状況という）とから成っている。たとえば、事柄としてある買物に言及しようとする場合を考えてみよう。買う行為・買う主体・買うものから成る中核部分のほかに、さまざまな空間的状況・時間的状況と、買いかた・代価・買う相手・理由・目的その他多様な観念的状況が考えられる。どの事柄も現実・想像世界の1場面を切り取ったものだから、無数の要素を含み、限りなく豊かで複雑なものである。

b. もちろん、発話者は事柄の全構成要素を語ろうとするのではない。発話者は、「知覚したり、想像したりすることのできることのごく一部しか言わない。無限に豊かな光景を前にして、いくつかの要素を言い表わすにすぎない」(POTTIER, B., 1987, p. 11)。発話者はまず、事柄の把握、すなわち概念化 *conceptualisation* を行なう。状況と文脈の総合的な認識に立って相手になんらかの働きかけをしようとしている発話者は、事柄中に認めうる無限に多様な要素のうちごく少数の要素に目をとめて、それらを登場役 *actant* (A) とする事柄のイメージ⁽⁴⁾を思い描く。言うまでもなく、これは意識的な作業ではない（相手の求めに応じて事柄の特定の構成要素を思い出そうと努めたりするような、例外的な場合もあるが）。イメージが、発話者の頭に浮ぶのである。

イメージは、原則として、なんらかの中核（ある要素とその事行）を含み、状況要素のみということはない。中核だけで状況要素をまったく伴わない単純なものから、多様な状況要素をいくつも伴う複雑なものまで、イメージの構成はさまざまである。たとえば、上記の買物の例の場合、中核を構成する3つのA（買う行為、買う主体、買うもの）だけに注目してイメージを形成することもあれば、場合により、中核の空間的状況（S）・時間的状況（T）・観念的状況（N）をいくつかAとして取り入れてより豊かなイメージを形成することもある。

2.2 要素間の関係：イメージの構成

a. 発話者は、イメージに登場する諸要素をなんらかの相互関係において捉え

る。中核の要素のうちのあるものにとくに関心を寄せて主要Aと意識し、その事行(状態・行為・動作、*etc.*)との関係で他のAを配置してイメージを作るのである。たとえば、買う行為・買う主体・買うもののうちどれを主要Aと意識するかによって、中核が「ある主体によるあるものの購入」、「ある主体があるものを買う」、「あるものがある主体に買われる」のうちのどれかになる。そして、場合によって、中核要素のまわりに状況要素を配してイメージを作っていく。たとえば、「ある主体があるものを買う」という中核に、買いかた(N)、買う場所(S)、買う時期(T)、買う理由(N)を添えるといったぐあいに。

発話者は、こうしてイメージの各Aを事行および他のAとのなんらかの関係において、ある姿において思い描く。ときには抽象性・一般性の高い「人」や「物体」のような姿において、ときにはより具体的・個別的な姿において捉える。実際、各Aはどのような観点からどの側面に注目するかによって、さまざまな姿において思い描きうる。多くの可能性のうちの一つを、発話者は、状況・文脈の認識と伝達意図に応じて選ぶ。たとえば、買う主体の姿を「旅行者」、「買物客」その他ではなく「観光客」と捉え、事行を「取得」、「獲得」その他ではなく「購入」と捉えるといったぐあいに。

このとき、事行は、ある展開の様相において、すなわち、あるアспект価値を帯びるものとして思い描く。たとえば、「買う」、「買おうとする」、「買いつつある」、「買ってしまっている」その他さまざまなありかたのうちいずれかを捉える。

また、発話者はしばしば諸要素を否定的に捉える。「負の捉えかた」は、事行にも(買うことはしない)、どのAにも(絵葉書は買わない)、事行とどの状況要素の関係にも(その店では買わない)、中核にも(観光客が絵葉書を買う、ということはない)、さらには<中核+状況要素>の全体にも及びうる。

この段階のTは、イメージの内部で中核に対してなんらかの時間的關係を結ぶ要素であるにすぎない。中核やTなどを発話時点に対して位置づける(すなわち、現実の時間の流れの中で捉える)のは、次のbに述べる、イメージの

「色づけ」の段階での操作である。この点で、事柄の展開の姿（アスペクト価値）を早い段階から捉えるのとは異なっている。

こうして、事柄の無数の要素のうち目にとまったいくつかの要素の姿と組み合わせがほぼ定まって、イメージの基本的な骨格がはっきりしてくる。それは次のように示すことができる：

イメージ構成＝中核（＋状況要素）

＝＜主要A＋事柄（＋他のA）＞（＋S）（＋T）（＋N）

b. これでイメージ形成・概念化が完了するわけではない。発話者は、イメージの内容について、現実性の度合い、好悪の感情、必要・不要の判断など、さまざまな観点からなんらかの印象を抱き評価を下している。たとえば、「観光客が／昼食後に／その店で／絵葉書を／買う」というイメージ内容を疑いの目で眺めたり、ありそうもないことと思ったり、反対に現実のことと判断したりする。また、喜ばしいことと感じたり、残念なことと思ったり、あるべきことと考えたりもする。同時に、相手への働きかけのタイプもイメージの印象・評価に関わってくる。たとえば、イメージを、相手に提供すべき情報内容として見ることもあれば、これから相手に実現させたいと望んでいる光景と捉えることもある。（イメージの中核やその他の要素の現実性が高いと捉える場合に、それらを現実の時間の流れの中で発話時点に対して位置づける操作が行なわれる）

発話者は、構成を定めたあとに、以上のような印象・評価に応じてイメージをいわば「色づけ」するわけで、これがプロセスの概念レベルでの最終段階であると考えられる。

3. イメージからフランス語表現へ

事柄についてイメージを形成した発話者は、フランス語による表現への移行段階を迎える。発話の形成にあたっては、とくに文脈の認識と、コミュニケー

ジョンの相手の言語能力についての評価などが大きな影響を及ぼすと考えられる。以下では、プロセスの後半、すなわち、語彙素の選択に始まる文構成過程の概要を示す。

3.1 語彙素の選択

一般に、発話者はイメージ構成にできるだけ「アイコン的に」対応するような構造の発話をめざす傾向があると考えられる⁽⁴⁾。そこで、原則として、中核の主要Aが述部付与 *prédication* の基部に相当するような構成の文を求めて、一連の語彙素を選択しようとする⁽⁵⁾。たとえば、買物の例の場合、主要Aが「購入」であれば、*achat (+ carte, touriste, etc.)* を、「観光客」であれば *touriste (+ acheter, carte, etc.)* を、「絵葉書」であれば *carte (+ être acheté, touriste, etc.)* を選ぶといったぐあいに。

もちろん、発話者はイメージ中の各Aの姿に最もよく対応するような語彙素を選ぼうと努める。事行については、展開の様相にも配慮して単純形・複合形を考えつつ動詞語彙素選択を行ない、必要な場合には補助的手段 (*commencer à, être en train de, finir de, etc.*) も採用する。また、「負の捉えかた」も、語彙素選択に影響を及ぼす (*non-, in-, 否定辞, etc.*)。

こうして選んだ語彙素 (主要Aが「観光客」の場合、たとえば *touriste, acheter, carte, magasin, déjeuner, etc.*) によって構成する文の意味構造 (そのような文が前提とし、発話を聞く相手が思い描くことになるはずのイメージの構成) を、当初のイメージ構成に照合して、選択の適否を判断し、問題がありそうなら別の語彙素を選ぶ。概念レベルと言語レベルをめぐりしく行き来するこの照合・選択の修正を、発話者は一瞬のうちに行なわねばならず、常に満足のいく語彙素選択ができるとは限らない。それどころか、ときには構成しつつある文の意味構造に影響されて、当初のイメージが変わっていくという逆行的現象も見られるであろう。

3.2 動詞結合要素と補足要素

a. 語彙素の選択において発話者が最も注意を払うのは、多くの場合、動詞語彙素の選択であろう。文の構成において決定的な役割を果たすのが、ひとつひとつの動詞語彙素の持つ意味的・統辞的結合可能性、すなわち筆者が言うところの動詞結合だからである。これは、曾我（1988, p. 154）にも記したとおり、POTTIER, B. (1987) で動詞語彙素の登場役結合 *module actanciel* と呼ばれるもの、すなわち、「フランス語常用者ならだれでも *don-* という語彙素を用いるとき、与える主体・与えるもの・与える相手から成る次のような結合を必ず考える：*<qn-donner-qc-à qn>*。この結合は、意味的に必要な最小限のもの」と説明されている結合体（p. 99）である。動詞結合は、単純な *<qn-marcher,>* *<qn-parler,>* *<qn-travailler>* のようなタイプのものや、より複雑な *<qn-allergqpart>*, *<qc-durer-tmp>*, *<qn•qc-devenir-qlté>*, *<qn-acheter-qc>*, *<qn-mettre-qc-qqpart>*, *<qn•qc-rendre-qn•qc-qlté>* のようなタイプのものなどさまざまである⁽⁴⁾。

上記の買物の場合、イメージ構成が含む中核の3要素は、たとえば *acheter* を選べば動詞結合の3要素によって表わすことができ、2つの状況要素はそれぞれ、*dans le magasin, après le déjeuner* のような補足要素によって表わすことができる。一般に、文の骨格は、次のように示すことができる：

文の構成＝動詞結合要素（＋補足要素）

＝＜主語＋動詞（＋目的語＋属詞, *etc.*）＞（＋補足要素）

b. 発話者は、このように、中核を動詞結合要素によって、状況要素を補足要素によって表わすような構造の発話をめざすものと考えられるが、常にそのような結果に達するとは限らない。動詞語彙素の選択しただけでは、状況要素を動詞結合要素によって表わすようなこともありうる。たとえば、「子供が／移動する」という中核と「広場の端から端へ」という状況要素から成るイメージ構成を表現するのに、なんらかの事情から *traverser* を選ぶようなことがあれば、状況要素は動詞結合 *<qn-traverser-qc>* の中の1要素によって表わすこ

とになる。反対に、中核のAを補足要素によって表わすこともありうる。たとえば、「青年が／イタリア旅行について／人々に／話す」という中核と「広場で」という状況要素から成るイメージ構成を表現するのに、たとえば, raconter を選ぶ場合を考えてみよう。raconter の動詞結合は〈*qn-raconter-qc*〉と考えられるから、中核のAのうちの「人々に」は補足要素（たとえば *devant le public*）によって表わすことになる。

ここで、中核を動詞結合要素によって、状況要素を補足要素によって表わすという一般的傾向に沿って、補足要素を次のように規定しておこう⁽⁶⁾：

ある事柄のイメージをフランス語で伝えようとするときに、しばしば状況要素を表わそうとして発話者が用いる、動詞結合要素以外の要素。

c. イメージ構成に対応するようにフランス語の表現素材を整えていくと同時に、発話者は、イメージについての印象・評価、すなわち、イメージの「色づけ」に応じて、フランス語のさまざまな様態付与手段のなかで適当と思われるものを用いる。それは、動詞叙法・時称形、ある種の動詞 (*devoir, pouvoir, vouloir, etc.*; *paraître, sembler, etc.*), 形容詞 (*vrai, faux, douteux, sûr, etc.*; *content, triste, etc.*), 副詞 (*curieusement, heureusement, etc.*; *certainement, peut-être, etc.*) など、多種多様なものである。現実性の度合いがある程度以上であると判断する場合には、発話時点に対する直接・間接の位置づけのために、直説法の活用形を採用する。

このようにして発話の素材を揃えると、発話者はそれらを線状に配列する。配列に関与する要因も多種多様であるが、イメージ構成を発話の諸構成要素間の階層構造に反映させようとする欲求が決定的な役割を果たすと思われる。文脈（とくに話の流れ）に照らして適当なテーマを掲げたり、ある要素を強調したりするために、話題化 *topicalisation*, 焦点化 *focalisation* などの諸操作を加えることもある⁽⁶⁾。

さらに発話者は、自分自身の伝達行為に言及することもある。たとえば、発話態度についての評 (*franchement, à vrai dire, à mon avis, etc.*) や文脈へ

の発話の位置づけの手段 (à ce propos, d'abord, en d'autres termes ; pour me résumer, pour revenir à, etc.) などがそれである。

4. 状況要素の表現：補足要素

状況要素は、中核諸要素に対してどのように関わるかという観点から見てもじつにさまざまである。ここでは、大きく、中核の中心部というべき事行に関係すると考えられるものと、中核全体に関係すると考えられるものの2つに分けて検討しよう。そして、それぞれについて、状況要素を表すのに、どのような補足要素を用いるのかを概観しよう。

4.1 事行に関係する状況要素の表現：補足要素

a. 中核が〈主要A＋事行＋他のA〉の構成のとき、ある状況要素が事行にのみ関係するのか〈事行＋他のA〉に関係するのかの判定はしばしば微妙である。この区別は、フランス語の補足要素を考えるうえではあまり重要でないと思われるので、ここでは両者を一括して扱うことにする。

まず、〈事行（＋他のA）〉に関係するSは次のようなものである。

「歩く」に対する「まっすぐ」、「前に」など。

「どなる」に対する「窓から」、「駅の方向に」など。

「名刺を／出す」に対する「札入れから」、「顔の前に」など。

「鉛筆を／転がす」に対する「机の上で」、「アランに向けて」など。

〈事行（＋他のA）〉に関係するTは無いと考えられる。一般に、われわれは主要Aを含む中核全体が時間の流れの中にあると捉えるのだから、これは当然である。（「買う」に対する「さっさと」や「話す」に対する「長々と」のような一見Tと思われるものも、事行の質、すなわちNと考えるべきである）

〈事行（＋他のA）〉に関するNにはさまざまなものがある。

「歩く」に対する「ステッキなしで」、「上手に」など。

「働く」に対する「一所懸命」、「子供のために」など。

「絵葉書を／買う」に対する「100フランで」、「子供に」など。

b. フランス語では、〈事行（＋他のA）〉に関するSを表わすために、どのような補足要素を用いるだろうか。上記aの例に即して考えても分かることだが（*tout droit, en avant, de la fenêtre, en direction de la gare, de son portefeuille, sous les yeux, sur la table, vers Alain, etc.*）、たいてい、副詞（類）と〈R＋SN〉⁷⁾の2種類の表現形式を用いるようだ。

〈事行（＋他のA）〉に関するNを表わすためには、やはり上記aの例に即して考えれば分かることだが（*sans canne, bien, dur, pour ses enfants, avec un billet de cent francs, à son enfant, rapidement, longuement, etc.*）、たいてい、副詞（類）および〈R＋SN〉の2種類の表現形式を用いるようだ。

4.2 中核全体に関する状況要素の表現：補足要素

a. ある状況要素が中核、すなわち〈主要A＋事行（＋他のA）（＋事行のS，N）〉にのみ関係するのか、これに中核のS，T，Nを加えた全体に関するのかの判定はしばしば微妙である。この区別は、フランス語の補足要素を考えるとあまり重要でないと思われるので、ここでは両者を一括して扱うことにする。

まず、〈中核（＋中核のS，T，N）〉に関するSは、中核の離脱点、舞台、到達点などで、次のようなものである。

「子供が／（＋前に）歩く」に対する「駅から」、「そこで」など。

「彼は／鉛筆を／（＋机の上で）転がす」に対する「教室で」など。

「観光客が／絵葉書を／（＋100フラン札で）買う」に対する「その店で」、

「パリでは」など。

〈中核（＋中核のS，T，N）〉に関するTは、中核に対する前後関係の項や、中核の持続・頻度などで、次のようなものである。

「彼は／鉛筆を／転がす」に対する「授業中に」、「ときどき」など。

「観光客が／絵葉書を／買う」に対する「昼食の後に」、「到着の朝」、「夏は」など。

<中核 (+中核の S, T, N)> に関する N は、原因・理由、仮定・条件、様態、目的・結果その他さまざまなものがある。

「彼は／鉛筆を／転がす (+授業中に)」に対する「退屈なので」など。

「観光客が／絵葉書を／買う」に対する「疲れているが」、「きれいな絵葉書があれば」、「家族に便りをするために」など。

b. フランス語では、<中核 (+中核の S, T, N)> に関する S を表わすために、どのような補足要素を用いるだろうか。上記 a の例に即して考えても分かることだが (de la gare, là, dans la classe, dans le magasin, à Paris, *etc.*), たいてい、副詞 (類) および <R + SN> の 2 種類の表現形式を用いるようだ。

<中核 (+中核の S, T, N)> に関する T を表わすためには、上記 a の例に即して考えれば分かることだが (pendant le cours, parfois, après le déjeuner, après avoir déjeuné, après qu'ils ont déjeuné, le lendemain de leur arrivée, en été, *etc.*), たいてい、副詞 (類), <R + SN>, <R + SV> の 3 種類の形現形式を用いるようだ。

また、<中核 (+中核の S, T, N)> に関する N を表わすためには、上記 a の例に即して考えれば分かることだが (comme il s'ennuie, bien qu'ils soient fatigués, s'il y a de jolies cartes, pour écrire à leur famille, *etc.*), たいてい、副詞 (類), <R + SN>, <R + SV> の 3 種類の表現形式を用いるようだ。

5. おわりに

コミュニケーションの場で、まず発話者は、言及しようとする事柄を把握す

る。形成するイメージの構成は、次のように示すことができる：

イメージ構成＝中核（＋状況要素）

＝＜主要A＋事行（＋他のA）＞（＋S）（＋T）（＋N）

イメージをフランス語で表現する段階で得られる文の構成は、次のように示すことができる：

文の構成＝動詞結合要素（＋補足要素）

＝＜主語＋動詞（＋目的語＋属詞, *etc.*）＞（＋補足要素）

イメージ中の状況要素は、動詞結合要素によって表わすこともあるが（例：＜*qn-aller-qqpart*＞中の *qqpart*, ＜*qn-emmener-qn-qqpart*＞中の *qqpart*, ＜*qc-durer-tmps*＞中の *tmps, etc.*），原則として、補足要素によって表わす。それには、次の2つの場合がある。

1. ＜事行（＋他のA）＞に関係する状況要素：

SとNがある（Tは無い）。SもNも、たいてい副詞（類）と＜R＋SN＞の2種類の表現形式によって表わす。

2. ＜中核（＋中核のS, T, N）＞に関係する状況要素：

Sは、たいてい副詞（類）と＜R＋SN＞の3種類の表現形式によって表わす。TとNは、たいてい副詞（類）、＜R＋SN＞、＜R＋SV＞の3種類の表現形式を用いて表わす。

従来は、この1, 2の他に、動詞結合要素の一部によって表わす場合の表現手段も、伝達行為に言及する手段も、状況補語・状況節というカテゴリーの中に含めて論じることがあった。そのように、機能するレベルの差異を考慮に入れなかった点にも記述の混乱のものがあったと言える。

1と2の全体を体系的に捉え、記述することが次の課題である。稿を改めることにしたい。

注

- (1) KERBRAT-ORECCHIONI, C. (1979, p. 101) に言うところの 《image du référent》。
- (2) HAIMAN, J. (1983) 参照。
- (3) 以下では、表記の煩雑さを避けるために、語彙素ではなく語を示す。
- (4) 動詞結合については、曾我 (1988), p. 155 参照。
- (5) 曾我 (1988, p. 150) 参照。
- (6) POTTIER, B. (1987, pp. 108-110) 参照。ただし、非人称化 impersonnalisation と登場役削減 réduction d'actance は、この段階ではなく、語彙素選択の段階で行なう操作と考えるほうがよい。
- (7) R は関係辞 relateur。

引用文献

- ARRIVE, M. *et al.* (1986) : *La grammaire d'aujourd'hui*, Flammarion.
- HAIMAN, J. (1983) : "Iconic and economic motivation", *Language* No. 56, pp. 515-540.
- KERBRAT-ORECCHIONI, C. (1979) : *De la sémantique lexicale à la sémantique de l'énonciation*, Thèse d'Etat, Univ. de Lyon II.
- POTTIER, B. (1974) : *Linguistique générale*, Klincksieck.
- (1987) : *Théorie et analyse en linguistique*, Hachette.
- PRANDI, M. (1987) : *Sémantique du contresens*, Minuit.
- 曾我祐典 (1988) : 「フランス語における補足要素」, 『人文論究』 38-3, pp. 147-158。
(文学部教授)